

大学生の友人といじめ観に関する研究

戸田 須恵子

北海道教育大学釧路校教育心理学研究室

The study of the awareness of friends and bullying in university students

Sueko TODA

Department of Educational Psychology, Hokkaido University of Education, Kushiro 085-8580, Japan

Summary

To study the awareness of friends and bullying in university students, 238 students participated in this project. They described their friends and bullying freely. They described their friends as reliable and helpful who share pleasure or problems. They also think that their friends are the most important persons in their life. Concerning bullying, they described children who bully or are bullied do not have a reliable friend. Children bully other children because they have some stress, do not have reliable friends or feel lonely. On the other hand, the children who are bullied seen to be weak and lonely children and they do not have any friends. Students think that teachers should teach about prosocial behaviors and how to communicate with friends.

はじめに

自分を取りまく人々は一つの心理的環境であり、その中でも友人は幼児期から青年期へと発達するにつれてその存在観や意義は重要度を増していく。幼児期の親子関係は親密な関係を維持しており、親の影響は大である。児童期になると、親とはやや離れた存在となり、少しずつ友達の方へ目を向き始める。そして青年期になると、発達課題であるアイデンティティの確立があり、その一つが親との心理的離乳である。親との心理的離乳を果たすためには、良好な友人関係がその底辺に存在すると考える。従って、青年期の友人関係は、親にとって替わる重要な存在ということになる。小学時代の友人関係はそれほど長続きはせず、ちょっとしたことで壊れやすい時代であり、そのような関係は中学時代にも続く。

いじめはこのような時期の友人関係で発生しやすい。従って、いじめは友人関係がどのようなかと密接な関係があり、友人関係のトラブルがいじめにつながっていく。小学校、中学校、高校を経てきた教員志望の大学生が、過去にどのような友人関係やいじめを経験してきたのだろうか。彼らは現在の友人関係やいじめをどのように考えているのか。将来彼らが教員となる事を考える時、彼らの考え方を知る事によって何を教育すべきかの一つの手がかりになるのではなかろうか。

友人の発達の变化

友人ということばは仲間という意識よりもより近い存在として捉えられており、友人関係に発達の变化が見られることは知られている。一般に友人(友達)は、幼児期の遊びの友から児童期の生活の友、青年期の心の友といった特徴を持つと言われている。これらの変化は、友人との関係の質的变化を示すものであり、年齢とともに友人に対して、より敏感になり、その時期における友人の意義は異なる。青年にとって友人の存在は生活の中で重要な位置に置かれ、その関係は親からの心理的離乳とも関係があるとされている。即ち、親からの心理的離乳の過程は友人関係が親子関係にとって替わると考えられている。しかし、岡本・上地の研究は異なる結果を報告している(1999)。彼らは中学生と高校生を対象にして親と友人に関するイメージを調査し、親と友人との関係の発達の变化を研究した。彼らは、青年前期(中学生)においては、同性の友人との間に友情が芽生え、中期(高校生)になると同性友人との親密さがさらに深まるとともに、異性との間にも親密さを求めるようになることを明らかにしている。一般に、親からの離乳が親密な同性、異性対象への関わりに移行すると言われているが、彼らの研究結果は、親への心理的な依存関係から離脱しつつも、母親との親密な関係を保持しつつ、友人との親密な

関係を結んでいくことを報告している。即ち、友人関係において親密さを増しても母親との結びつきは切れないでその後も続くことになる。

落合・伊藤・斉藤(1994)は、友人の発達的变化を孤独感との関係で述べており、孤独を感じる時、人は友を求め、その関係が破れた時孤独を感じ、それに耐えられなくなって又、友をを求めることを述べている。このような友人関係を繰り返すことによって真の友人を見出すことができるのであろう。さらに、榎本(1999)は、中学生・高校生・大学生を対象にして友人との活動と活動を通しての感情の発達的变化を研究している。友人との活動では、相互理解活動、親密確認活動、共有活動、閉鎖的活動などが見られ、特に、高校生において閉鎖的活動の増加が見られることを報告している。又、感情的側面に対しては、信頼・安定、不安・懸念、独立、ライバル意識、葛藤の5つの感情的側面が見られ、男女とも信頼・安定、独立の感情が他の感情より強かったことを報告している。これらの結果は、高校生の友人に対する感情には肯定的なものとする否定的なものが混在していることがわかる。又、高校生に閉鎖的活動が増加するという結果は、親からの独立意識が強くなっており、親やその他の人からの独立過程に友人の存在が重要であることを示唆している。又、相互理解活動も中学生から高校生、さらに大学生と増加の一途を辿っており、はっきりした発達的变化が見られる。性別に見ると、男子中学生では共有活動得点が最も高く、高校生では共有活動と相互理解活動得点が最も高く、男子大学生では相互理解活動得点が最も高い。女子中学生は親密確認活動得点が最も高く、女子高校生では閉鎖的活動得点が高く、女子大学生では相互理解活動得点が高くなっている。中学生、高校生でははっきりと性別によって活動が異なるが、大学生になると相互を尊重し理解しあう関係と変化していることが明らかである。感情的側面を見ると、男子では、中学生、高校生、大学生とも独立の得点が最も高く、女子では、やはり、中学生、高校生、大学生とも「信頼・安心」の得点が高かった。これらのことから、男子は女子より親から独立しようとする意志が見られ、又、女子の方が男子より、より発達した友人関係を持っている事が伺える。

友人関係のつき合い方の発達に関して、落合・斉藤は中学生から大学生までを対象に、友人のつき合い方の変化について研究している(1996)。彼らの研究によると、つき合い方の点から考えると、中学生は浅く広くつき合おうとしており、それが高校生から大学生へと年齢が高

くなるにつれて、深く狭くつき合おうという気持ちに変化してくるようである。即ち、友人として親密な関係を持つ方向に変化していることが推測できる。

以上の研究から、青年後期、特に、大学生の友人関係は、お互いに尊重しあい、相互理解に基づいた親密な友人関係を築くようになってきていると言える。しかし、親子関係や発達の個人差を考える時、全ての大学生がこのような友人関係の発達段階に達しているとは考えられない(リチャーズ & ウイルス, 1984)。

友人と自己との関係

友人関係は自己概念や対人関係スキルと深く関係していると考える。岡田(1993)は、内省と友人関係のあり方について研究し、内省に乏しく、友人関係においても退却的傾向を示す者は、ふれあい恐怖の心性を持つことを報告している。又、彼は友人関係のあり方を2つの因子によって測定し、その結果、男子においては、友人との深い関係を回避する「関係回避因子」得点が高く、女子においては、お互いにトラブルのないよう相手に気をつかいながら友人関係を維持しようとする「躁的防衛因子」得点が高かったことを報告している。このように友人関係のあり方は男女によって異なることが明らかである。さらに、岡田(1995)は、自己意識との関係を測定している。彼は、友人関係においては3つの因子を見出し(群れ関係群、気遣い関係群、関係回避群)、群れ関係群の青年は私的自己意識得点が低く、自分自身を動的と認知しており、親友像を基準とした現実自己像を把握していた。又、気遣い群の青年は、現実自己像と理想自己像の相関が高く、一般的な青年の特徴を示していた。関係回避群の青年は、自己像と親友像の関わりが希薄で、自己と非自己を明確に区別する傾向が強かった。肯定的項目では、現実自己像、理想自己像、親友像がそれぞれ別の枠組みで認知されている一方で、否定的項目では、現実自己像と親友像の間で類似性が見られた。このように自己に対する認知と友人とのつき合い方には深い関係があることがわかる。

いじめについて

最近、いじめは大きな社会問題となっている。いじめの原因は様々であり、その解決方法はいろいろ示されているものの、現実においていじめは後を絶たない。いじめという行為は昔から存在していたにも拘わらず、近年社会的問題になったことの原因として、いじめが以前よ

り悪質になってきていることやそれによって幼い命を絶つという自殺の増加が挙げられよう。いじめにも身体的いじめと、ことばなどによるいじめや無視といったいじめがある。あるいは直接当人をいじめる場合と、間接的にいじめる場合がある（仲間にあの子とは遊ぶなどという等）。統計的な数字を見てみると、日本で、学校におけるいじめがピークと言われた1985年度には文部省調査によると小中高等学校を合わせて発生件数は上半期だけで15万5000件余りだという。1990年度以降は発生件数が2万2000~2万4000件あたりまで減少している。ところが自殺した子どもの数は1994年には7人で1985年と同数である（浜田・野田、1995から抜粋）。自殺の増加は、いじめの質が悪質化・陰湿化してきていることを物語るものであろう。いじめられる者は弱者とは限らない。深谷の調査によると、小学生の男子では「不潔な感じのする子」が最もターゲットにされやすく、次いで「いつもグズグズしているのろい子」、「いかにも弱そうな子」と続いている。女子では、「自分勝手な子」が最もターゲットになりやすく、次いで「不潔な感じのする子」「いつもグズグズしているのろい子」の順になっている。又、中学生では男子で最もいじめられやすいのは、「何となく生意気な子」で、次いで「自分勝手な子」「不潔な感じのする子」の順となっている。女子では、最もいじめられやすいのは「自分勝手な子」で、次いで「何となく生意気な子」「不潔な感じのする子」の順となっている。このようにいじめられやすい子は順位こそ違え、男女ともいじめられやすい子の特徴は似ている（深谷、1997）。いじめのメカニズムとして深谷は、少し悪いが大して悪いことだとは思っていないという子どもの行為がいじめのはじまりだと考えている。又、正義の為とか〇〇君のためにするといったことでいじているのだという。その他、「スリルがあって楽しい」「仲間と連帯できる安定感」といったいじめに対する心理があるという。又、そのいじめの背景には、受験に伴う塾通いや習い事からくるストレスの蓄積を原因として挙げている。その他「弱い者いじめを恥としない子ども社会の文化」「見ているも我関せずの傍観者の拡大」「少子化による喧嘩体験の不足」「子ども集団内でのリーダー性に欠けるという変化」などを挙げている。このようにいじめのメカニズムが明確になってきているにも拘わらず、いじめは後を絶たない。どのようにいじめを防止することができるのだろうか。そのような疑問の中で、将来教員を目指す教育大の学生がいじめに対してどのような考えを持っているのか実状を知る

ことが必要であると考え。彼らの友人の存在、友人間のいじめについて理解することは、今後の友達関係やいじめに関する教育に役立つと考える。

以上の事から、本研究は、大学生にとって友人の存在意識を調査し、そのような友人の存在意識からいじめをどのように見ているのかを明らかにし、今後のいじめ防止策への手がかりを見つけることを目的とする。

方 法

被験者：大学生を対象に友人に関する意識と友人との関係から見たいじめについて自由記述をしてもらった。238名から資料を得た。又、238名中29人(約12%)は本人がいじめたりいじめられたりした経験を持つものであった。中にはいじめ側といじめられる側を経験した者もいた。

手続き：授業を通して質問紙を配布した。質問は、「あなたにとって友人とはどんな存在なのでしょう。さらに、今日問題となっているいじめについて、友人との関係からあなたの意見を述べなさい」で自由記述方式をとった。**データ整理：**友人についての考え方は様々である。各人自由に記述しており、友人を持っていないと記述している学生も数人いた。学生が友人についてその存在観をどのようなことばで表現しているかを調べるには、その表現していることばをすべてとりあげる事が学生の友人に対する意識がより理解できると考えた。記述も一人の者が複数書いている場合、そのまま複数の数だけ項目として挙げた。少ない者は1項目しか記述していないが、多い者は4項目位記述していた（例えば、「私にとって友人はかけがえのない存在であり、私が悩んでいる事に相談にのってくれる」と記述している場合には、かけがえのない存在項目と相談相手項目に分類する）。いじめ項目についても同様の手続きで分類した。さらに、友人に関する項目はKJ法により9カテゴリーに分類した。

結果と考察

1) 友人の存在意識

友人の存在意識についてまとめたものが表1である。表1から、最も多く記述していたのは「信頼・安心感」カテゴリーである。学生は、友人を信頼できる、あるいは安心感を与える存在であり、何でも話せる相手として認識していることがわかる。次いで教育的・援助的存在でこの中には、親には話せない悩みや問題を相談す

表1 友人の存在感

カテゴリー	人数	主な項目
1. 相互理解	130	共有、相互理解、意見をはっきり言える仲
2. 自己高揚・成長	89	成長、人格形成、学びあう
3. かけがえのない存在	126	友がいないと生きていけない、心の支え
4. 信頼・安心感	184	信頼、安らぎ、安心感、何でも話せる
5. 教育的・援助的	174	相談相手、助けてくれる、励ます、アドバイスする
6. 親密感	21	家族・親のよう、愛情
7. 競争的存在	19	ライバル、ケンカ
8. 比喩的表現	12	太陽、空気、元気の素、心の栄養剤
9. ネガティブな友人観	12	うわべだけの関係、非常に扱いの面倒な存在 孤独を紛らわす存在、ストレス解消

る相手として述べられている。三番目に多いのは相互理解である。この中で最も多かったのが、楽しみや苦しみを共有する仲であるという項目である。又、良いこと悪いことなどお互いにはっきり言えることを挙げている者もいた。彼らは、はっきり言えない友は真の友人ではないと考えているようである。又、「かけがえのない存在」と述べている者も多く、中には、友がいないと生きていけないといった記述をしている者もいた。このように多くの者が友人を肯定的な存在として、あるいは自分の人生にとってかけがえのない存在として捉えているという事実は、友人の質的な発達の変化として青年期後期の段階に達していると言えよう。しかし、中には真の友人が一人もいないのでほしいと記述している者もいた。又、9.「ネガティブな友人観」カテゴリーのように、友人関係をネガティブに捉えている者もいた。ネガティブに友人を捉えている者は、真の友人を持っていないのではないかと推測される。たとえ友人を持っていたとしてもそれは単なる友達でしかない存在であり、信頼して悩みなどを話すまでには至っていないのではなからうか。友人についてある者は、友人を何人持っているかという量ではなく、どのような友人を持っているか、即ち質が重要であると述べており、大学生ともなると落合らの研究結果(1996)からも明らかのように、深く狭いつき合いである事が伺える。又、ある者は部活や、入寮したことによって大学生になって初めて真の友人を持つことができたことと記述していた。小学校から高等学校までの学校という環境の変化と自分を取り巻く友人とのいろいろな出来事を経験しながら友人観も変化していったのではなからうか。だからこそ、現在の満足した友人関係ができていないのではないかと推測される。ネガティブな友人観につい

ては、自己概念との関連もふまえてさらなる研究が必要であろう。

2) いじめについて

いじめについて学生はどのように考えているのだろうか。友人といじめは紙一重であると述べている者もいた。いじめは対一では殆ど起こらず、多くはリーダーがいてグループでいじめている場合が多いようである。いじめの起きる原因として挙げたのは、表2にあるような事柄である。最も多かったのは、友人関係の希薄さがいじめの原因という意見である。次に多かったのは、友人間の遊び、ふざけ、からかいがいじめに発展するという項目である。いじめている本人は、ふざけのつもりでも、被害者はいじめられていると思うという事が多いのかも知れない。さらに、異質排他的という事も一つの原因であるようである。この事は、日本社会が「人並み」を重視し、出る杭は打たれるという諺のように何かでまわりより異なっていたり、秀でている特徴を持っていなければいじめに会いやすいということである。社会的要因として他に挙げているのは、日本の国の豊かさが原因とする意見である。例として、アフリカの貧しい国ではいじめはないという。さらに、豊かさは物質重視の社会であり、そのために心が病んでいるという意見もあった。又、学歴重視が仲間間の競争に拍車をかけ、友人関係を破壊し、友人は敵となりいじめが発生するというものである。さらに、そのような学歴重視が受験ストレスを生み、ストレスのはげ口としていじめが発生すると述べている。社会が原因という他に、家庭や学校にあるという意見もあった。家庭が原因とするのは、共働きのため、忙しくて親が子どもに愛情を与えないというものである。又、少

表2 いじめの原因と特徴

人数	項 目
4	本人はいじめているという意識がない (気がつかない)
24	親しみやふざけで肩をばんとたたくと相手は暴力と思う、遊び、からかい
2	淋しさから自分に気を引きたいという思いから人に手を出す (いじめ)
5	ムカムカした気持ちやストレスをいじめで発散
11	孤独からいじめへ
4	親から愛情を受けずに育ってきた人達、親子の信頼関係の弱体化
1	友人とのささいな食い違いや誤解からいじめは始まる
2	競争社会である限りいじめはなくなるならない
2	いじめの原因は家庭にある
2	いじめは学歴社会の中で生まれたもの
2	日本の国の豊かさがいじめの原因
14	現代のいじめは異質排除的
62	友人関係の希薄さ、友人との信頼関係が成立していない
4	自分とは気が合わない
6	学校、教育制度、家庭、親の養育
2	いじめによって仲間を確認しあっている
7	現代のいじめは傍観者の増加である

子化のためきょうだい喧嘩をした経験を持たない子が増加し、喧嘩しても手加減がわからずいじめに発展してしまうというものである。深谷は、現代の子どもの特徴として「われ関せず」でいられる子どもが増加している事もいじめ増加の原因として挙げているが(1997)、本研究でも多くの者が傍観者の増加をいじめの原因として挙げている。

いじめの時期については、いじめを経験した者のほとんどが、小学校又は中学校でいじめを経験している事を述べている。実際にいじめが発生するのは小学校と中学校に集中していると言える。文部省が調査したいじめ発生件数を見ると、平成7年度で小学校 26,614 件、中学校 29,069 件、高等学校 4,184 件と、圧倒的に小、中学生が多く、高校生になると減少している (有村久春, 1997)。

表3 いじめる子いじめられる子の性格および行動特徴

いじめる子	いじめられる子
<ul style="list-style-type: none"> ・いじめて安心感を得る ・孤立している ・相手の痛みがわからない(2) ・社交的でない ・友をつくるのが下手 ・まわりに流されていじめ ・いけないという勇気がない(3) ・いじめる事をやめようと言ったら自分がいじめられる ・いじめているという感覚がない 相手が悪いと思っている(4) ・精神が不安定で幼稚な人(2) ・まわりを気にして力のある人の下につく ・他人の心がわからない、無関心 ・心の弱い人 ・信頼関係が成立していない ・弱い者いじめ ・遊びといじめの区別がつかない ・ストレスのはけ口(11) ・うさばらし(受験、きびしい規律と体罰による管理)(4) ・コントロールができない、止める人がほしい ・集団に加わりいじめに加わる(15) ・孤独をまぎらわす手段 ・身体的特徴をバカにする ・優越感や劣等感からくるストレスの発散する手段としていじめる、人より優りたいと思っている ・気が合わない子を仲間はずれにし、いじめる(4) ・いじめる事にしか興味の持てない人 ・理由もなく故意にいじめる(11) ・自分の思いどおりにしたい(支配欲) ・命の大切さを理解していない ・自分に自信のない子 	<ul style="list-style-type: none"> ・成績の劣る子(3) ・優秀な子(2) ・ちょっと風変わりな子(2) ・個性豊かな子(3) ・内気な子(2) ・友達のいない子(1) ・自己中心的(1) ・弱い子、ひよわ、気弱な子(10) ・八方美人 ・仲間はずれにされやすい ・うそつき ・自信なし ・出しやばり ・消極的な人が多い ・地味な人 ・クラスで一人いる子 ・つき合い方の下手な子 ・孤独になってしまっている人 ・何でも話せる友人がいない(43) ・理解してくれる友人がいない ・優しすぎる・お人よし ・性格が激しく短期でわがまま、自己顕示欲が強い ・淋しい子で自分のカラに閉じこもる ・助ける人や守ってくれる人がいない(3) ・他の子と違う子(親が働いていない、服が汚い、臭い勉強ができない、流行遅れ)

() の数字は人数

いじめられる子いじめられる子の特徴

表3にはいじめられる子といじめられる子それぞれの性格や行動特徴が示してある。いじめられる子の性格や行動特徴は、いじめの原因とも関係があるが、ストレスのはげ口としていじめるといふ意見が最も多かった。また、いじめられるのをやめようと言うと自分がいじめられるので他の子と一緒にいじめている子もいるという意見も多くあり、この意見は、実際にいじめを経験した者が多かった。中には、いじめの現場を見ても自分は関わりたくない為、見て見ぬふりをするだろうと記述している者や、いじめには必ずリーダーがいて逆らえないと記述している者もいた。又、いじめられる子どもは、いじめているという意識も罪悪感も持っていないのが問題だと批判している者もいた。さらに、いじめられる事によって快感を味わっているのだと述べる者もいた。

いじめられる子の特徴も千差万別であり、肯定的な特徴を述べている者もいれば、否定的な特徴を挙げている者もいる。しかし、最も多かったのは「いじめられた時に何でも話せる友人がいない」という項目であった。又、弱い子がいじめの対象になりやすい事が明白である。しかし、浜田・野田(1995)が述べている「いつもぐずぐずしてのろい子」を挙げている者はいなかった。いじめを経験した者の中には、何故自分がいじめられているのか理由がわからなかったと述べている者もいた。いじめられている子は相談する相手もなく、先生も信用できない、そのために自殺に追いやられてしまうのだという意見が多かった。しかし、中には自殺は現実逃避だ、自分勝手な行動だと非難している者もいた。さらに、いじ

める子もいじめられる子もどちらも悪いと述べている者は、両者とも淋しい、自分の立場を理解していない、本当の友人あるいは相談する友人を持っていない、気持ちのつながりがない、頭で理解しているが行動できない等を記述していた。両者ともフォローが必要と述べている者もあり、これらは両者共通する特徴と言えよう。中には、いじめられる子もいじめられる子も被害者で加害者は社会だと社会を非難している者もいた。

いじめ対処方法と終結

ではこのようないじめに対してどう対処すればよいのか。最も多かったのは、何でも話す真の友人を持つ事であるとする意見が多かった。何でも話せる友人がいれば、いじめられている事も話し、友人と一緒にいじめと闘ってくれるだろうというものである。先生は、子どもが何でも話せる友人を持てるよう援助する事が必要であると述べている者もいた。友人が助けてくれるだろうという意見は、いじめの経験がない者が多く記述していた。しかし、一方で、いじめられた経験を持つ者の中には、自分が友人と思っていた友がいじめの側にいたとか、友人がいじめられていても、助けると自分がいめられるので何もしなかった、あるいは無視していたと告白している者もいた。果たして友人がいじめと共に闘ってくれるのか、あるいはいじめの側になるのか、傍観者となるのかは、ケースによって異なるようである。又、いじめをなくす為には、親に責任があり、親として子どもをあたたかく包む事が必要だと述べている者もいたが、学校と家庭が話し合うべきだという意見はなかった。

表4 いじめをなくすには何を教育すればよいか

社会・学校での教育

- 先生の対処の仕方及び努力次第でいじめはなくなる
(社会で問題になった時、先生の知らなかったという発言はうそ)
- 学校は個性を尊重、自由視するよう努力すること
- 教育制度のあり方を改善すること
- 何でも話せる真の友人を持つこと、先生はがそれに援助すべきである
- 学校の対応のしかたを改善すべし
(校長や担任はすぐ人のせいにして事件から逃れようとする)
- 学校は遊び方を教えること

学校・家庭での教育

- 心の育成 (人の情を教える、他人を理解しようとする心、思いやりの心)
- コントロールする力
- 個性性を早くから教える
- 他人の良いところを探すくせをつけさせる
- 人とのコミュニケーションの仕方 (つき合い方) を教える

いじめが終結するきっかけはどのような事柄がきっかけとなるのだろうか。いじめられた経験を持つ者は、友人が支えてくれ、そのお陰でいじめている子に立ち向かえたと述べていた。傍観者ではなく、このような友人の働きかけもいじめの終結の一つである。又、本研究で、小学校の時にいじめられた経験者が、卒業した時に終結したと述べているように、大井は(1997)、いじめは卒業によって終結するケースが最も多い事を報告している。小学校では次いで教師の働きかけが多く、中学校ではクラス替えによって終結し、教師の働きかけは第3位に位置しており、教師の働きかけがいかに重要かを示していると言えよう。教師は学校という組織の一部ではあるが、学級経営は教師の手腕が問われる。どのように学級を運営し、学級を構成する一人一人の子どもとどう向き合うかは教師の人生観ともつながるだろう。教師は単に知識を教えるだけではすまされない。特に、小、中学校においては、教師の人間性が問われるのである。自分のクラスの子どもがいじめていたり、いじめられていた時、どのように対処するのか、自分の力では困難と思えば、専門のカウンセラーなどに相談する勇気も必要であろう。

いじめをなくすための教育

子どもに何を教育すればいじめはなくなるのだろうかという事に関する学生の意見は表4にまとめてある。社会や学校制度、教育制度が悪いとか、教師が悪いとか親が悪いとかといった事のみを挙げている者は、具体的にどうすればいいのかといった具体策は述べていない。しかし、表4にあるように、先生や家庭が心の教育をすべきだという意見が最も多かった。中には、いじめから自殺した事件で新聞に載せられた校長や教師のことは「知らなかった、気づかなかった」という記事を批評し、教師は知らないはずはないと断言している者もあり、学校や教師の身勝手さを鋭く批判している者もいた。教師がどのように子どもと接するか、自分のクラスをどのように運営していくかが問われるようである。中には、自分が教師になったら子どもと話し合いをしたり、空手や柔道をたたき込んで自信をつけさせたいと述べている者もいた。その他、教師は、子どもに仲の良い友達がつくれるよう指導する事とか、友人の大切さを教える事、我慢強さを教える事、あるいは遊び方を教える事、リーダーにいじめられている子と仲良くするよう指導方法を考える事、道徳の時間にシュミレーションをする事、心豊かな子に教育する事などの意見もあった。又、カリキュラ

ムを見直す事が必要と述べている者もいた。又、校長や教師は他人に責任転嫁しているなどの批判も見られた。これらの意見を総合的に見ると、教師を信頼していない者もいるが、多くは、教師がいじめについて教育する事を期待している者が多いといえる。

おわりに

友人関係は子どもの発達によって質的な変化を見せる。何でも話せる友人を得た時の喜び、真の友人と思っていたにも関わらず、関係が破れた時の悲しみ、そのような一喜一憂を繰り返しながら友人との信頼関係が成立していく。アンケートに答えてくれた学生の多くがいじめを防ぐには友人関係が重要と述べているのも真実である。その友人関係の成り立ちは又、親子関係からも影響を受けている。その関係の中で、自分がどのように友人と向き合うかは個々人のコミュニケーションの仕方と自己や他者をどれだけ受容することができるかにも関係あり、自己概念との関係は今後検討すべき必要がある。さらに、いじめについて教師からの意見を聞く事も今後の研究課題であろう。学生の友人観やいじめに関する上記の意見を考慮しながら、学生とともにいじめについて考え今後の教育に役立てていきたい。

引用文献

- 有村久春 (1997) II-3-(1)いじめ発見の困難性と背景
いじめの解明 今井五郎・嶋崎政男・渡部邦雄編 第一法規
- 榎本淳子 (1999) 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化. 教育心理学研究, 47, 180-190.
- 深谷和子 (1997) II-I-(3)いじめの心理機制と背景
いじめの解明 今井五郎・嶋崎政男・渡部邦雄編 第一法規
- 浜田寿美男・野田正人(1995) 事件のなかの子どもたち：
「いじめ」を中心に 岩波書店
- 落合良行・伊藤裕子・斎藤誠一 (1994) 青年の心理学 有斐閣
- 落合良行・伊藤有耕 (1996) 青年期における友達とのつきあひ方の発達的变化 教育心理学研究 44, 55-65
- 岡田努 (1993) 現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係 発達心理学研究 4, 162-180
- 岡田努 (1995) 現代大学生の友人関係と自己像・友人像

- に関する考察 教育心理学研究 43, 354-363
- 岡本清孝・上地安昭 (1999) 第二の個体化の過程からみた親子関係および友人関係 教育心理学研究 47, 248-258
- 大井健次 (1997) II-4-(3)-① いじめの把握と指導の手順
- いじめの解明 今井五郎・嶋崎政男・渡部邦雄編 第一法規
- Richards, A. K., & Willis, I. (1979) Boy friends, girl friends, just friends 片岡しのぶ訳 (1984) 子どもが友だちをつくる時 晶文社